岡山理科大学紀要 第44号 B pp. 43-50(2008)

三枝博音のカント解釈と技術論

—Einbildungskraft を中心に—

中島　聰・村下　邦昭*

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

＊岡山理科大学非常勤講師

(2008年９月30日受付、2008年11月７日受理)

１　本論の目的

三枝博音（1892－1963）は技術史の研究者として知られる。と同時に、三枝は唯物論に傾倒したがカント及びドイツ観念論の研究においても大きな足跡を残している。そして、三枝はしばしば自身の技術論とカント哲学とを関連させて論じている。カントにおける技術論は現在でも少ないが[1)]、三枝の論考はそのような数の希少さからではなく、哲学的思惟あるいは技術哲学において重要な意義を持っている。

本論稿は三枝の技術論とカント論との接点として重要な論点と考えられる Einbildungskraft を検討する。以下で詳述するように、三枝はこの語について一般に使用される訳語「構想力」を単純に使っていない。三枝はその述語に「形像を描く力」や「想像力」という訳語を用いる。これは単なる想像作用ではなく、対象認識や技術のプロセスにおいて重要な意義を持つものである。さらに、三枝の Einbildungskraft の議論に関連して重要である Bild の概念についても併せて考察を行う。これらによって、三枝の論考が示す技術論の一つの可能性を示したい。

２　Einbildungskraft の解釈における Anschauung の意義

まず本節と次節において、三枝が Einbildungskraft について直接論じている『哲学するための序説』(1948 年：以下『序説』と略す）における解釈を追いつつ、考察する。ここでは、まず、『序説』「認識について」の三の４「いわゆる「構想力」と「形像を描く力」（アインビルドゥングスクラフト）について」の前半を Anschauung の解釈とともに考察する。

さて、『序説』では、認識論について直観あるいは「観る」が論述の中心となっている。そこでは視覚的に捉えられる形だけが問題なのではなく、思惟による把捉も問題とされる。つまり、視覚による形の把握だけではなく、「こころが観るのもかたちを観るである」(『序説』p.320)。但し、心による把捉、つまり思惟による把捉だけは認識は成立しない。この心による把捉は「心（ゲミュート）が心（ゲミュート）を観るというより外に表現の仕方はない状態」である（ibid.)。三枝はこのことをカント『純粋理性批判』における心や自己直観についての議論に拠って論じていく。たとえば、主観が自己直観すること、心による表象の定立などを利用する（たとえば『純粋理性批判』B66 以下）[2)]。三枝は特に直観ないしは「直観する」(Anschauung／anschauen) に着目している。そして、三枝は anschauen を an と schauen に分離し、an を「～につけて」あるいは「何かに機会されて」(『序説』p320) と解して、anschauen を「つけて観る」と訳している（『序説』p.320 以下)。

この「つけて観る」は「想像ということの中にある形象」であると考えてみる（『序説』p.321)。これは想像の対象であるから、具体的なものを考えるのではなく、漠然とした形象である。あるいは、それは「つけて観る」によって再現された一つの形象である。このように「つけて観る」という働きは外的な対象を捉えるのではなく、心象イメージとして人が思い浮かべるものを対象としている。しかし、このような「つけて観る」という働きは「思う」ということに直接リンクするものではない。人が何かを思い浮かべる時、それは再現された一つの形象である。「つけて観る」の働きは、純粋な思惟（純粋な思う）と同様に純粋なものでなければならない（ibid.)。

純粋な思惟は「私が私である」ことを保証するものであり、カントの述語を用いるならば、それは「統覚」(Apperzeption) である（ibid.)。しかし、統覚のみでは自己認識は成立しない。それは「思う」だけでは認識が成立しないことと同様である。そのため、統覚とは別に自己認識を成立させるための要素が必要である。そして、そ

の要素が「つけて観る」である（ibid.）。

「思うには何ら機会づけということ」がなく、「観るのは形を見るのであるから、それはどういう形であるかという一つ一つの機会づけが副っている」（ibid.）。つまり、純粋思惟の場合、思うそれ自体の純粋な働きであるから、思うを引き起こし、思うに関係づけられる「機会」あるいは対象は存在しない、ということである。そして、つけて観るは形に、対象に関係しており、それに対して働くものであるから、それらを機会として生じる活動である。しかも、その機会によって捉えられる形は、先に述べたように、再現されて捉えられる形ではない。しかしまた、漠然とした形を捉えるものでもない。つけて観るが機会によって捉える形はこうである、と「はっきりわかっているもの」である（『序説』p.322）。これとは逆に、はっきりとしない形は、たとえば「私が私を思う」というようなことである（ibid.）。つけて観るははっきりとした形を捉える。この捉えることができる形は、そのようなものとして「ある」のではなく、つけて観るに対して「現れる」ものである（ibid.）。これに対し、思惟は形のないものを捉える。

さて、「現れる」は捉える働きに応じて生じる活動であり、別の呼び方をするのであれば、「描く」ことである（ibid.）。これに対し、「ある」ということは純粋思惟に他ならない（ibid.）。「描く」は何かを再現して描くのではなく、つまり、「原形」にしたがって描くのではなく、「描かれるものをはじめてつくる」ことであり、「創造する」ことである（ibid.）。しかし、「つくる」あるいは「創造する」といっても、何も無いところから、何の機会も無しにそれらを行うのではない。とはいえ、再現するように「つくる」のでもない。即ち、

> 「(一)「つけて観る」（アンシャウウンク）において、今言われているつくるとは、全く何の機会もなくただ単にわけなくつくることではない。日本語でいういわゆる「宙に」つくることではない。
> （二）しかし、すでに私たちのうちにもっているものをもう一度つくり直してみるような再現的なものではない」（ibid.）

つくるとは、機会にしたがって、模倣することなく、純粋につくることである。したがって、「(三) 純粋であるが、機会づけられたものでなくてはならない」（ibid.）。純粋であるものが機会づけられるということは「矛盾」をはらんでいる（ibid.）。純粋である以上、単にそれだけで、自己を原因としたものでなければならない。この自己原因が機会かどうか、という問題が生じる。三枝はこの問題の前に、純粋思惟と想像力（形像を想う力）との関係を問題にする。

ここで三枝はデカルト『省察』、特に「第六省察」における想像力と純粋知性との関係を問題にする[3)]。デカルトは、人が三角形を想像する時、それを三つの線に囲まれた図形として理解するだけではなく、「これら三つの線をあたかも精神の眼に現前するもののごとくに直観するのである」と述べる（『省察』p.106）。しかし、たとえば、千角形の場合、人はそれを理解することはできるが、精神の眼に現前するものとして直観できない（ibid.）。この直観をデカルトは想像力（imagination）と、三枝の訳に従うならば、「形像を想うこと」と呼ぶ。そして、「想像するためには心のある特殊の緊張が、すなわち理解するためには私の使わないような緊張が私に必要であることを明らかに認めるのであって、この心の新しい緊張は、想像力と純粋な悟性作用〔知性〕との間の差異を明晰に示している」（『省察』p.106-107）。この緊張が起きるのは、精神が「何か或る物に拠っている」からである（『省察』p.107、『序説』p.323）。これによって精神とは別の物体が存在することが類推される。しかし、ここまで問題にしてきた「つけて観る」は、「私たちの外に物体が存在」することに基づいていることなのではない（『序説』p.323）。つまり、三角形を描くことは、目の前に三角形があり、それを思うことではなく、また、既に知っている三角形を再現することでもない（ibid.）。このことは既に見てきたとおりである。機会はあれど、他に拠って想像するのではない。しかし、デカルトに従えば、何か或る物に拠っていることになり、そこに精神の緊張がある、ということになる。三枝は問題をこの「緊張」に向ける。あるいは、「実に千角形を思惟する場合の没形像性に対照してみて三角形を中心に描く場合の形像性」が問題とされる（ibid.）。その上で、純粋思惟と想像力との間を明晰にする「緊張」を考察の対象とする。

認識作用の事実の根底に純粋思惟と並んであるものは、つけて観ることの他には無く、つけて観る以上、形が描かれている。純粋思惟と形を描くことの間にある差異こそが、緊張である（ibid.）。そして、この緊張に機会づけが結びつく。まず、緊張が上述した「(三) 純粋であるが、機会づけられたものでなくてはならない」における、前項とどのように関係しているのか。人が三角形を想像する時、精神は緊張状態にあり、記憶などによってただ再現されるように行われたり、外部の物に従って成立していたりするのではない、という点において、これは純粋である

(ibid.)。次に、「(三)」の後者「機会づけ」との関係はどうなっているのか。あるいは、何に機会づけされるのか。この問題が現在考察している三枝の論述の後半部にあたる。そこで、節を改め、考察を続けることにする。

3 Einbildungskraftの解釈、特に『純粋理性批判』第二版による解釈

「形像を描く力」[4] (Einbildungskraft) の機会づけはどのように行われ、それはいかなる意味を持っているのか。

三枝はEinbildungskraftの『純粋理性批判』における解釈が第一版と第二版とでは異なることを注意する。つまり、「第一版では形像をえがく「能力」を独特の心(ゲミュート)のもつ力として強調しすぎている」(p.324)。したがって、第一版が「心理学的解釈」であることを三枝は認める(ibid.)。これに対する第二版は、「「つけて観ること」における「形像をえがく力」を捉えて解釈している」(ibid.)。そして、統覚と「形像をえがく力」とが「対立的折衝」において捉えられている(ibid.)。三枝はこの点を注意した上で、「形像を描く力」について、第二版におけるカントの論述を七つの項目にまとめている。以下では、カントの当該箇所に対する伝統的な解釈をあえて踏まえず、三枝のEinbildungskraftの解釈の是非、妥当性を含めて、この七つの項目を直接、考察していくことにする[5]。

> 「(一) 形像をえがく力は、あるもの(ein Gegenstand)をそれが現にここになくとも「つけて観ること」においてえがく(vorstellen)力である。
> (二) 形像を描く力は[人間のアンシャウウンクは必ず感性的であるから、(一)に言える如くアンシャウウンクにおいてえがく力である限り]感性に属するものである。
> (三) 形像を描く力は[何か別に主動力があって作用するところの力ではないから]自発性の作用である。自発性の作用であるから、単に感性に属しているのみでなく、感性を限定する(bestimmen)ものである」(ibid.)

まず、この三項目を考察する。『純粋理性批判』第二版の当該箇所は、「超越論的分析論」の24節(特にB151ff.)以降となる。

さて、最初の二項目であるが、これは『純粋理性批判』の論述のままであり、それを三枝が自身の述語に応じてまとめているものである。項目(三)は『純粋理性批判』の論述を組み替えている。まず、『純粋理性批判』の当該箇所を引用する。

> 「構想力の総合が自発性の使用である限り、つまり、その使用が限定するものであり、感性のように単に限定可能ではない限り、したがって、ア・プリオリに感官をその形式にしたがって、統覚の統一に応じて限定できる限り、構想力はその場合に限り、感性をア・プリオリに限定する能力である」(B151f.)

三枝の要約では、「総合」と「ア・プリオリ」という述語が抜けており、また、条件づけも省かれている。その上で、構想力、形像を描く力が自発性を持つ、ということが確定されている。前者の述語の脱落については、多少問題があろう。しかし、『日本に於ける哲学的観念論の発達史』(1934年:以下『発達史』と略す)[6]の中に、この箇所の構想力に着目した論述があるが、総合やア・プリオリに着目したものではなく、構想力と統覚との関係を、当時の日本の研究者を批判しながら、独自の解釈を進めて行くものである。したがって、述語の脱落の問題は、ここでコメンタリーを行うとしても、一定の回答を単純に出し得ない。しかし、ここでは、構想力の総合がどのような意味を持つか、ということが重要なのではなく、構想力がどのように働くのか、ということが重要である。したがって、構想力を自発性との関係を取り上げる。

その自発性については、上記『純粋理性批判』の引用の直ぐあとに論じられている「生産的構想力」(B152)と関係を持っていると思われる。この生産的構想力は、『純粋理性批判』において、経験的なものに基づく「再生産的構想力」から区別される(ibid.)。つまり、生産的構想力は何かを再現するような働きではなく、純粋に働く力である。そして、純粋に働くために、それは自発的な活動であると言えるだろう。しかし、まだ「機会づけ」の問題が残されている。この点は後に考察するとして、ここでは感性の限定に論を向ける。

感性については、三枝の上記の例にしたがうならば、三角形の例が好例となるだろう。三角形を思い描く場合、それは経験的なものを前提にして、再現的に描かれるのではない。三角形を自発的に、それ故に、ア・プリオリに描くことができる。したがって、構想力は感性的に捉えられうる三角形という図を描くという働きによって感性を限定することができる。この時、統覚の統一は、自己意識として、つまり、「私が私を思う」として働いており、その上で、三角形は思い描かれるのである。それ故、三角形の図は感性に属するが、それは構想力、形像を描く力に

よってア・プリオリに限定されている。

> 「(四) 形像を描く力は (一) に言えるが如く、「アンシャウウンクにおいてえがく力である」限り、もろもろのアンシャウウンクにかかわる作用であり、しかも、(三) に言える如く「自発性の作用である」限り、もろもろのアンシャウウンクを総合するものである。
> (五) 形像を描く力は、自発性である限り、産出的な構想力 (produktive Einbildungskraft) と呼ぶことができる。
> (六) [形像 (Figur) にかかわるものゆえ] 形像的総合と呼ぶことができる」(『序説』p.324-325)

まず、(四) であるが、この項目は (六) と併せて考察するほうがよいと思われる。

「ア・プリオリに可能的であり必然的である感性的直観の多様さのこの総合は形像的 (形像的総合) 〔figürlich (synthesis speciosa)〕」と呼ばれる (B151)。この総合は、単なるカテゴリーにおいて考えられる直観一般の多様さの総合、知性的総合から区別される (ibid.)。「もろもろの直観の構想力の総合は諸カテゴリーに応じて、構想力の超越論的総合でなければならない」(B152)。つまり、単にカテゴリーに応じた総合ではなく、構想力によって捉えられたものの総合がここで論じられている。しかも、その総合はカテゴリーに応じるため、感性の多様さを総合する際、超越論的でなければならない。そして、この総合は感性的直観が形像に関わるために形像的総合である。

このような総合作用について、三枝は次のようにまとめている。

> 「彼〔カント〕は直観一般の多様に関する総合と感性的直観の多様の総合とを厳に区別する。後者は『形像的総合』と特に呼ばれる。これに対して、前者は『知性的総合』である」(『発達史』p.443／p.284)

感性をア・プリオリに限定する作用が構想力であるから、多様な感性の総合、あるいは感性的直観の総合が形像的総合であることは明白であろう。この構図が直観にもあてはめられ、直観もまた構想力によって総合される。

(五) は『純粋理性批判』の言葉をそのまま利用している。そして、三枝は項目に挙げていないが、構想力のあり方に「再生産的構想力」(B152) がある。しかし、これは先に論じたように、経験によって想起されるものであるから、ア・プリオリではないため、退けられる。

> 「(七) [以上の如くであれば、形像をえがく力 (アインビルドゥングスクラフト) のみで足りる如くであるが、形像をえがくということのみでものを知る、ものを認識するということは成立しない。故に、以上の如き形像をえがく力は「われ思う」の純粋知性、つまり、統覚との関係において作用する。] それ故、(三) に言える如く、「感性を限定する」のは統覚に相応して (der Apperzeption gemäss) 限定するのである」(p.352)

ここで、構想力と統覚との働きが協働的であることが示される。このことはたとえば内官の問題として『純粋理性批判』で述べられる。

> 「内的感官は直観の単なる形式を含むが、しかし直観における多様さの結合はなく、したがって限定された直観をまだまったく含んでいない。この限定された直観は、私が形像的総合と呼んだ構想力の超越論的な働き (中略) による多様さの限定の意識を通じてのみ可能になる」(B154)

内官によって捉えられるものは形式だけでしかなく、それに内容を加えるのは構想力の働きである。たとえば、先に挙げた三角形のイメージや三次元空間の把握などが例として挙げられる。そして、これは根本に「私が私を思う」という統覚があるために可能なのである。構想力と直観の多様によって、統覚による統一に応じて、認識が成立する (Vgl. B157ff.)。そして、この認識が成立することが機会づけられているということであろう。この時、自己原因だけでは、純粋思惟や統覚のように認識が成立しない。

したがって、三枝が論じるように、「統覚に相応して」感性を限定することによって、そのように機会づけられて認識が成立する。これは自発的であって、触発されて成立するのではないように思われる。実際、三枝の構想力を中心としたカント解釈では触発の問題は殆ど扱われていない。現象面に現れてくる形像に論の力点が置かれているように思われる。この点が三枝のカント解釈の一つの限界であるかもしれない。

4 Bildの解釈

三枝はカントにおけるEinbildungskraftの問題を、Bild（形像）の問題と同一視している（cf.『技術の概念』p.404：1944年：以下『概念』と略す）。

形像とは具体的に目の前に存在するものだけを指すのではなく、頭の中に描かれた三角形なども指す（『概念』p.410）。そして、形像は「ある」のではなく、心に現れるように「現れる」のである（『概念』p.412）。この現れは対象が無くとも心の中に描かれうる、という点でEinblidungskraft「形像を描く力」と結びつく。この力は人知を越えたところに起源を持つのではなく、「現実に行われている人間の諸々の認識」にのみ起源を持つ（ibid.）。そして、人間の現実的な認識において、思惟や所与、形像、心の受容・現れが一つの事象として働いている（『概念』p.414）。

先に述べたように、形像は現前するものだけではなく、思惟においても生じる。そして、それは形式的な型についても同様だとされる。つまり、プラトンのいうイデアも形像であり（『概念』p.407）、身体的表現を持って表される「礼」もまた形像である（『概念』p.414）。あるいは、心に描かれるときのように何かしらの様式を持たないようなものもまた形像である（『概念』p.412）。

ところで、技術は何かが実現されるという点において過程であり、過程としての手段である（『概念』p.415）。手段はmittelというような媒介的なものではなく、むしろ「仕方である」（『概念』p.416）。そして「その方は型に通ずる如き具体的な方法の意味」を持つ（ibid.）。さらに、この「仕方は形像的なものである」と解される（ibid.）。しかし、これは単に現象面だけを捉えることではなく、その仕方の根本にあるものを重視する。つまり、具体的に車を製造するとか、家を建てるとか、パンを焼くといったような個別的なものではなく、全ての技術に通底する意味を仕方ということから読み取ろうとする。三枝はその例として、東洋の「礼」を挙げている。作法によって表される具体的な形像が礼の技術における仕方の現れなのである（『概念』p.416-417）。

このような三枝のBild論はどのような意義を持つのだろうか。

目下の問題に対する『純粋理性批判』の論述箇所は図式論の箇所である（特にB179ff.）。三枝は『文学のフィジカとメタフィジカ』（1938年：以下『文学』と略す）において、この図式論に触れている。

『文学』の一つの節「構想力の或る理論」は、『純粋理性批判』の論述を引用する形で始まる。まず、5つの点を紙に打つ、という思考実験が行われる。この5つの点は「5という数の形像（Bild）である」（B179）。これに対して、頭の中で考える5という数字は形像ではなく、概念である。したがって、「概念にその形像を与える構想力のある一般的な方法の表象を、私はこの概念に対する図式と呼ぶ」（B179f.）。図式論について、ここで深く立ち入ることはせず、この図式が生じる場面、つまり概念と形像との関係が存在する場面を考察する。

さて、概念は形像ではない。なぜならば、「ある概念に対する対象がそこに現に存在しなくても、形像は描かれるのである」（『文学』p.175）。つまり、「形像は生産的構想力という経験的能力の産物である」（B181）。このことはこれまで論じてきたことである。形像は形像を描く力の働きによって生じ、その枠組みを概念あるいは図式がもたらす、と言えるだろう。但し、形像と概念は直接的に結びつきあうのではなく、構想力という手段によって結びつくのである（B181）。しかも、この構想力は統覚のように客観性を与えはしないが、直観において対象を能動的に表す感性的な力である。但し、前節で示したように構想力は統覚と協働して感性的な規定（限定）を行うのである。そして、その結果として現れるのが形像Bildである。しかし、これは現象する形像であって、イデアの形像ではない。では、イデアの形像とは何であろうか。

たとえば、三角形のイデアがあって、人が三角形を想起する時に、頭の中で三角形の概念が描かれる。しかし、それをそのまま紙に描き起こすことはできない。イデアは一つの手本であり、原形であり、理想像であり、形像である。「礼」にもこれと同じことが言える。礼は一つの作法の様式であり、どのようにするかは知られていても、それを完全に行うことはできない。理想とされる礼のあり方を想起しながら、具体的な活動を行う。そして、「想起」は生産的構想力として働いていると考えられるだろう。何故ならば、形像は「想起」を通じて経験的に産出されるからである。経験を通じて、その形像がイデアの形像とは異なることを人は知る。したがって、イデアの形像は経験的に現れた時に、反省的に知られるものであろう。

三枝のBild論はイデアから具体的な現象としての形像まで広く解釈された論であろう。イデアの形像があって、それを人が想起によって捉え（生産的構想力によって作り）、概念（図式）によって枠組みを作り、現象界に形像が現出される。このような一連の流れの中で、形像を描く力（構想力）は、形像と概念との媒介を果たす。

5 手段としてのEinbildungskraftの可能性—結語に代えて—

「ほんとうに仕方と言われるのは形像的なものであると断定され得るのである。技術は過程としての手段であるという場合の手段は、かような形像的意味をもつ仕方を指すのである」(『概念』p.417)。

この一節が本論稿の結論になるだろう。これを解釈することによって、三枝の論じるEinbildungskraftがどのような意義を持ち、技術論の中でどう活きるのかを論じる。

「仕方」は手段である。この仕方や手段という述語について、たとえば、いかにしてそれを為すのか、どのようにそれを作るのか等など考えられるが、ここでは「手段」そのものに着目する。手段はそれが直接的であろうと間接的であろうと、何か補助を受けようと、対象に変化を加える働きといえるだろう。その時、手段も変化も具体的なものであり、したがって、形像的なものになる。たとえば、５つの点を打つという時に、手段は筆記用具やパソコンなどであり、紙や画面などの対象に５つの点を打つという変化が生じる。この時、形像を描く力がどのように働くのか。まず、５つの点を頭の中に描き、そこに５と点のイデアという形像が出来上がる。しかし、カントはそれは概念であるという。三枝は形無きもの、たとえば「礼」を形像と呼ぶように、そして、形像を描く力がそうであるように、初めに登場するのは概念ではなく、既に形像なのである。しかし、この５と点のイデアという形像はそのままでは何も生じさせない。人はここに概念（図式）をあてはめていく。そのあてはめ作業が形像を描く力なのである。さらに、５つの点をどのように打つか、という時に、そこには原形は無い。Einbildungskraft（想像力）によって、５つの点は打たれる。それゆえ、この点の打ち方、打つ仕方もまた形像的なのである。

技術は過程としての手段である、と言われるとき、この手段の一つがEinbildungskraft、形像を描く力なのである。さらに、形像を描く力は、形像と概念との媒介を果たす。「放肆なる想像」ではなく、「必然的に対応するBild」(『文学』p.176）である抽象的な形像から概念に、その概念から具体的な形像へという過程において形像を描く力は手段として、したがって技術として働くのである。

三枝のカント解釈と技術論とを併せるならば、Einbildungskraftこそが結節点であり、三枝の技術論を明確にする活動である。対象無きところから対象を、形像を作り出すということは、単に芸術的なものだけではなく、現代の技術論においても重要になってくるだろう。カントの時代では、技術（Technik）というよりは技芸（Kunst）が重要であったかもしれない[7]。しかし、現代では、想像力としてのEinbildungskraftによって、たとえばパソコン内部の世界、つまりヴァーチャルによって対象が存在しない形像だけの場が可能であろう[8]。あるいは、初めは対象が存在したと考えられるが、最終的にオリジナルが不明になるシミュラークルの問題もある[9]。

カント解釈において、このような技術論の立て方は、三枝自身が述べるように『判断力批判』の詳細な研究が求められる。ここでは、触れないが、技術と「快・不快の感情」との関係を三枝は示唆している。さらに、カントのKunst論においても、単にそれを趣味判断・芸術の領域で論じるのではなく、技術論としても可能であろう。このように、カント解釈に様々な新しい視点を付け加える点で、三枝が行ったようなEinbildungskraftの技術論を通じた解釈は非常に重要であろう。（了）

主要参考文献（順不同）

三枝博音『三枝博音著作集』中央公論社：1972-77年
三枝博音『日本に於ける哲学的観念論の発達史』清水弘文堂書房：1969年
デカルト著　三木清訳『省察』（岩波文庫）岩波書店：1949年
Kant, I., *Kant's gesammelte Schriften.*, hrsg. von Königlich Preußishen Akademie der Wissenschaft, Walter de Gruyter & Co., Berlin, 1900ff.
カント著　高峯一愚訳『純粋理性批判』（世界の大思想12）河出書房新社：1967年

著作収録元（順不同）

『哲学するための序説』（『著作集』第8巻）
『技術の概念』（『著作集』第8巻）
『文学のフィジカとメタフィジカ』（『著作集』第6巻）
『技術の哲学』（『著作集』第9巻）
『日本に於ける哲学的観念論の発達史』（『著作集』第2巻）

註

1）先行研究が全く無いわけではないが、数が非常に少ない。この少なさは問題の広がりが無いからではなく、アプローチの問題であろうと推察する。

2）『純粋理性批判』のページ付けについては、慣例に従って第一版をA、第二版をBとする。
3）『序説』の註には『方法序説』の「第六省察」とされているが、『省察』の間違いと思われる。なお、以下『省察』における述語については、三木清訳を基本としたが、一部村下による変更を行っているが、それについては特に示さない。また、三木清訳からの引用については、旧仮名遣いなどを現代仮名遣いなどに変更しているが、これについても特に示さない。
4）以下で幾度か、三枝の著作より引用しているが、三枝において「形像を描く力」と「形像をえがく力」の二種の表記が混在している。引用に関しては、原文どおり表記する。それ以外では「形像を描く力」を原則とする。
5）なお、三枝は註において、三木清の『構想力の論理』を二度、指示している。しかし、本論稿の目的から外れるため、三枝と三木との解釈の異同については特に論じない。
6）この書籍は『著作集』では、分割されて収録されている。簡便のために単行本版のページを付す。前者のページが『著作集』第２巻のページであり、後者が単行本版のページである。
7）TechnikとKunstの違いについては大きな問題だが、他日を期して論じたい。
8）たとえば、2008年北京オリンピックの開会式での花火の一部がＣＧであったことなど、近年リアルとの違いがとみに不明瞭になっている。
9）シミュラークルについては、拙論「ヴァーチャル上のデータベース情報に関する試論―その存在論と倫理―」『哲学』第58号：広島哲学会：pp. 67-81（2006年）、及び拙論「ヴァーチャル世界と主観」『岡山理科大学紀要』第42号Ｂ：岡山理科大学： pp.1-11（2006年）を参考にされたい。

Saigusas Kant-Interpretation und technische Theorie

—mit der Erörterung über die Einbildungskraft—

Satoshi NAKASHIMA and Kuniaki MURASHITA*

Department of Socio-Information, Faculty of Infomatics,
Okayama University of Science
** Okayama University of Science, Docent*
1-1 Ridaicho, Okayama, 700-0005, Japan

(Received September 30, 2008; accepted November 7, 2008)

Saigusa verbindet die Kant-Interpretation mit seiner technischen Theorie. In diesem Fall spielt die Einbildungskraft eine wichtige Rolle. Einbildungskraft wird gemäß der Erfahrung oder einem Ding nicht durchgeführt. Einbildungskraft ist eine Macht, die eine Bild spontan vom Platz erzeugt, der keinen Gegenstand hat. Jedoch ist es nur eine sich vergegenwärtigende Vorstellung. Einbildungskraft gibt ein Bild dieses Begriffs. Einbildungskraft wird zwischen einem Begriff und einem Bild begangen. Es gibt Einbildungskraft als ein Mittel, einen Begriff in ein Bild zu ändern. Das Mittel wird Technologie genannt. Das ist anwendbar auf die virtuelle Erklärung in der Gegenwart.